

月例研究会（2023年3月22日）

『ビヨンド！ KDDI 労働組合 20 年の 「キセキ」』を書くということ

本田 一成

本報告では、KDDI 労働組合（KDDI 労組）の結成 20 周年を記念して発行された『ビヨンド！ KDDI 労働組合 20 年の「キセキ」』（2022 年、新評論刊）を取り上げ、著者がその発行に至るまでの約 4 年間の活動を振り返り、論点を提示して検討した。

その意味では、一般的な分析研究の報告とは言えないが、一連の著書の制作活動を踏まえた知見や、改めてあえて単著を発行するという行動の背後にある考え方を紹介して、視点を広げている。

労組の周年記念誌を市販本に代えるという労組側の発想が斬新であるし、実際に書店に並ぶ本書は異形の書となっている。

KDDI 労組の前身は、1953 年結成の国際電信電話労働組合（国際電電労組）であり、それを承継した 1998 年結成の KDD 労働組合（KDD 労組）である。これらではユニオンショップ協定が締結されていた。2000 年に KDD、DDI（京セラ系第二電電）、IDO（トヨタ系日本移動通信）の 3 社合併が成り、KDDI 労組となった時点で、オープンショップとなった。だが、2012 年に再びユニオンショップに戻った。

企業別組合とは何だろうか。四半世紀前に著者に大学卒業証書を手渡してくれた白井泰四郎の手による『企業別組合』と、比べるべくもない本書ではあるが、KDDI 労組の歴史が企業別組合は何たるかを語っているのは間違いない。

60 人以上の関係者のインタビュー、資料や写真の掘り起こしなどは、振り返れば心楽しい作業に見えるが、執筆になると一筋縄ではいかない。あえてノンフィクションを志向したのは、実名で書くというハードルを課すためである。

それに成功したかどうかは不確かであるが、本書刊行後、労組から同様の記念市販本の執筆の依頼が引きも切らない。また、労組リーダー研修テキストに使われているから、それなりの意義があることはわかった。だが著者はもうやるつもりはない。その労力は著者に残された研究時間を大きく奪う。学問として何の評価もされず報われないのも事実である。

研究会では、大学教育の現場で労使関係や労働組合の内容が大幅に縮減されていることや、学会でそれらを扱う若手研究者が目立たないことへの危惧が話題になった。しかし、大学教育や研究者の育成の前に、労働組合の存在や役割、登場する人々の姿のリアリティを国民が理解する機会を逸していることが気になる。

著者の持論であるが、本の出版だけでよいわけではない。スピード感のある SNS や手っ取り早く理解できる動画も大切である。だが、広く国民にじんわりと理解させるには、ドラマや映画が有効なのではないだろうか。

また、その前提になろうが、あえて若い研究者の皆さんを想定して、単著で本を書くことの意義やノウハウを意識しながら、ハッパをかけた。誰かが続くならば、新しい出版領域を拓いたということになろう。

最後に、本書の生みの親であり、著者を口説いて出版させた杉山豊治氏（元連合総研副所長）が自ら手に取ることなく夭逝したことは、本当に残念に思う。合掌。

（ほんだ・かずなり 武庫川女子大学経営学部教授）